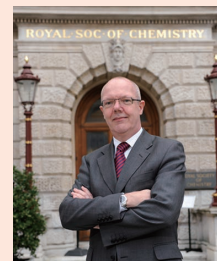




学会出版の成功事例—英国王立化学会の戦略

ロバート・パーカー 英国王立化学会 常務理事



1841年の設立以来、英国王立化学会は最新かつ最も優れた科学研究の成果を発表する場を提供してきた。初代会長のトーマス・グラハムは、当時のロンドン化学会の第1回会合でユストゥス・フォン・リービッヒの投稿論文を読み、それがのちにThe Transactions of the Chemical Societyに掲載された。

それから170年経った今も、我々は最新かつ最も優れた科学研究の成果を発表する場を提供し続けている。しかも当時の化学者たちでは達成しえないスケールで、さらに驚異的なペースで、そして想像もしなかったようなテクノロジーを使ってそれは行われている。

1848年に英国元首ヴィクトリア女王によって、当会の意義「化学の推進」に勅許状が承諾された。そして、その勅許状に書かれてある目標の一つである「化学の発展のための化学知識の育成と普及」を、雑誌、データベース、書籍の出版を通して当会会員及び世界中の化学コミュニティに貢献することで実現している。

非営利団体という立場から、我々の出版活動の黒字部分は、当会の目標である「化学の発展のための化学知識の育成と普及」を達成するために使われている。具体的には、教育、政策、支援、科学的活動やコミュニティ構築を目的としたイベントの開催、そして化学に関連するスキルの開拓などである。すなわち出版活動は、化学情報を広めるという直接貢献にとどまらず、他の活動の多くもサポートしている。そのためにも、出版活動が長期的に我々の目標をサポートできるように、先を見越して計画を立てることが必要であった。

2008年には出版する雑誌や書籍の質と量の両方の成長戦略に着手した。その背景には、化学と関連分野のすべての領域において、研究者が最も画期的な研究成果を発表する場を当会の雑誌の中から選択できるようにしたいという点、そしてより多くの読者がその成果を容易に見つけアクセスできる環境を用意したい、という点があった。また出版する文献が、公正かつしっかりとした査読プロセスを経ているという信頼を持続させたいということも考えていた。

この戦略は成功した。そしてその成功は数字に裏付けされている。2008年には60冊の書籍と24誌に合計で7,000の論文を発行したが、2013年には27,000の論文と91冊の書籍まで増えた。わずか5年で373パーセントの成長を達成したのである。ただし、この成長は品質を犠牲にしたものではない。平均のインパクトファクターも4.9から5.7に

上がっている。

我々の戦略は五つの主要分野に力点を置き、進められた。それは、コミュニティの関与；編集委員会；高品質の維持；新しい雑誌、書籍やデータベースの提供；そして出版パートナーシップである。

コミュニティの関与

我々が関係するコミュニティとの緊密な交流は、戦略の重要な一部であった。出版する雑誌や書籍は、その関連分野にターゲットを絞ったマーケティング活動を行い、編集者はより多くの科学イベントに参加し研究機関を訪問した。状況に応じて対応を変えることで、研究者と適切な情報を共有するだけでなく、研究者から出版物に対する考えを聞くことができ、その結果、著者と読者に提供するサービスを改良することができたのである。

さらに世界中の研究者とコンタクトし、世界規模でネットワークを強化し続けている。主要な地域での関係強化のために、日本、米国、中国、インドで編集部を設立した。浦上裕光が東京を拠点にした日本の王立化学会のマネージャで、2013年の入社以来、多数の研究機関を訪問し、多くの研究者に会っている。東京の事務所は日本化学会と同じビルにあり、二つの学会は協力しあいながら、密接な活動をしている。

主要国のすべてにおいて、投稿数および発行論文数は増加している。コミュニティとの交流は、研究資金と発行論文数が大幅に増加している国、例えば中国、では特に効果的であった。今や中国は論文数の点で、当会の出版物における最大の貢献国である。

編集委員会

成功の大きな要因は、王立化学会に投稿する研究コミュニティの中で「大使」の役割を担う研究者の存在である。当会の雑誌および書籍の編集委員およびアドバイザーボード（顧問委員会）は、各分野のリーダーである世界的に著名な研究者から構成されている。彼らのサポートと推薦はその雑誌や書籍の品質を保証し、また提言は我々をコミュニティの要望やニーズを満たす方向に導いてくれている。

高品質の維持

我々はここ数年の出版計画のすべての立案・実施において、品質維持を最も重要視してきた。公正で透明な査読プ

プロセスを行っているという評価を落とさないための努力を惜しまず、また査読者が各誌の領域と基準を十分理解できるように取り組んできた。

2008年以來、当会の出版物の平均インパクトファクターは16%上昇している。新たに出版したEnergy & Environmental Science と Polymer Chemistry は、2013年のインパクトファクターがそれぞれ15.5と5.4であり、すでにそれぞれの分野における主要雑誌としての地位を確立している。

新しい雑誌、データベース、書籍の提供

既存の雑誌の発表論文数を増やすだけでなく、2008年以來新製品の発売計画にも着手している。

雑誌については、ギャップが存在する領域や化学と周辺分野の境界領域に着目してきた。新たに発行した雑誌は、著者と読者層を広げ、王立化学会の認知度を上げた。多くの新刊雑誌は、それぞれの分野のインパクトファクターランキングで既に上位にいる。

また、王立化学会のある雑誌で掲載を断られた論文についても、ほかの適切な雑誌に回すというプロセスを確立した。これにより、著者は再提出をよりスムーズに行え、また改めて査読をする必要がなくなり、著者と査読者の両方の時間と労力を削減することができた。

書籍においても2008年以降12の新しいシリーズを発行している。またデータベースの提供も拡大しており、世界的に著名なMerck Index^{*1}やMarinLit(海洋天然物文献データベース)などを2013年に取得した。

出版パートナーシップ

我々は雑誌の出版を通じて38の姉妹学会や機関とパートナーシップを確立している。パートナーシップの形態は様々で、雑誌のタイトルの共同所有や、広報協力、または他の組織に代わり雑誌を出版するケースもある。これらのパートナーと協力することで、相互に活動の認知度を高めることができ、我々のコミュニティを拡張している。

一つの例として、当会の出版物であるBiomaterials Scienceと京都大学の物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)との連携がある。iCeMSと共同でリリースしたこの雑誌の編集委員長の中辻教授と共同編集者の杉山教授はiCeMSに拠点を置いている。彼らの協力により、この雑誌の領域を、iCeMSが得意とする研究分野である「物質科学と細胞科学の統合とメソスコピック科学」に形づけることができた。そしてこの連携により、雑誌とiCeMSの両方が国際的な存在感を高めることができた。

日本化学会の出版物の拡大へ

上記に示したすべての取り組みが我々の存在を高め、世界における影響力増に寄与している。そして日本化学会が我々と同じ方向に進んでいるのは素晴らしいことである。日本化学会の主要2誌であるChemistry LettersとBulletin of

*1: THE MERCK INDEX という名称は、Merck & Co., Inc. (Whitehouse Station, N.J., USA) の関連会社である Merck Sharp & Dohme 社が所有しており、英国王立化学会は米国とカナダでの使用ライセンスを取得している。

the Chemical Society of Japan は高品質の研究成果を掲載するという評判を引き続き高めていくことだろう。日本化学会が新しく開発したジャーナルウェブサイトでは発表論文をより容易に見つけることができ、また編集委員会に新たに導入したシニアエディターの存在が国際的な認知度を上げるのに貢献するだろう。

すべての科学系雑誌と同様に、雑誌が継続的に成功を取るには、テーマに即した内容で影響を与え続け、新進気鋭の研究者と同時にその分野の権威たちを魅了し、読者が関心のある研究への容易なアクセスを提供することが必要である。

出版の未来

出版業界は日々変わっている。新しいテクノロジー、科学技術分野、そしてオープンアクセスジャーナルのような新たな機会が現れる中、我々は世の中の変化に着目し、サポートするコミュニティのニーズに対応できるような体制を築いておかなければならない。我々は引き続き、出版物のポートフォリオの充実を積極的に図り、コミュニティとの関与という強みを生かし、既存および新製品を発展させ、新たなパートナーシップを構築していこうと考えている。

科学系雑誌の電子出版が進むことで、雑誌論文や書籍の電子情報の双方向性やアクセスの改善を図る機会を得たことを非常に喜ばしいことである。

オープンアクセス誌についてはいくつかの取り組みを進めている。その中の一つとして、2015年1号から我々の旗艦誌であるChemical Science誌をフルゴールドオープンアクセス誌に転換することを決めた。そして2017年までの2年間は無料で投稿、購読できるように論文出版加工料は免除することにした。当会のオープンアクセス出版の取り組みについては、科学技術振興機構から出版された論文^{*2}を参照願いたい。

我々はまた、姉妹機関との連携強化を進めていこうと考えている。そして日本化学会がその連携先の一つであることを非常にありがたく思っている。2010年に国際協力協定を調印して以来、両機関で多くのシンポジウムを共催してきた。最近では、2014年6月にアイルランドのダブリンで開催した第5回日英シンポジウム—超分子化学があり、次は日本化学会第95春季年会において共同企画を予定している。

学会出版の未来を担う団体として、互いに大きな成功を達成することを楽しみにしている。

訳：上野京子（化学情報協会）

© 2015 The Chemical Society of Japan

*2: Open access publication and the Royal Society of Chemistry (邦文)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/57/1/57_475/_pdf

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp